

## 令和2年度(2020年度)第2回宗谷圏域障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会議事録

- 1 日 時 令和3年(2021年)2月25日(木) 13:30～15:30
- 2 場 所 宗谷合同庁舎 4階 大会議室
- 3 出席者 別添「出席者名簿」のとおり
- 4 議 題 別添「次第」のとおり
- 5 資 料 別添のとおり
- 6 挨拶及び新任委員紹介

### (1) 挨拶

影山社会福祉課長より開会の挨拶を行った。

### (2) 新任委員紹介

第1回委員会後に就任された2名の委員の紹介及び自己紹介を行った。

併せて、第1回委員会に欠席した委員の自己紹介を行った。

内田委員：枝幸町のNPO法人南宗谷ひだまりの会でサービス管理者をしている。去年までは上川管内当麻町の社会福祉法人当麻かたるべの森にいた。その前は社会福祉法人稚内木馬館にいて、宗谷圏域障害者総合相談支援センターの立ち上げに関わった。

小倉委員：稚内市で、発達障がいの子を持つ親の会いよの会の代表を務めている。先天性内反足という病気と自閉症スペクトラムを持ち特別支援学級に通う小学生の娘と、言語の遅れがあり早期療育通園センターに通う年中の息子がいる。

川口委員：障がいを持つ息子が3人いる。

同居している息子は、新型コロナウイルス感染症対策による生活環境の変化に対応できる面、対応できない面があった。

## 7 議 事

### (1) 説明事項 地域課題及び第1回委員会の議事概要

地域課題及び第1回委員会の議事概要について、資料1のとおり事務局より説明を行った。

### (2) 説明事項について各委員からの意見

〈川口委員〉

下の息子2人が養護学校だったけれど、隠したいという親が結構いて、私みたいにオープンに買い物とか連れて歩く親は、なぜそんなに笑ってられるのとか、おかしいんじゃないのと言われるような時代だった。

学校以外で、買い物とかに親が(障がいのある)子どもを連れて歩いている姿ってほとんど見ないし学校の行事とかには参加するけれど、卒業後は買い物とかで地域に出て、顔を知ってもらおうというのが、とても大事なことだと私は思う。

買い物に連れて行ってるけれど自分だけ買い物して、子どもほったらかしにしている親もいて、それはかえってマイナスだと私は思う。いつも、またほったらかしで好きなことやってるのねって思っているけれど。

今の時代、何かあったら怖いでしょう。その時に、障がいのあるお子さんが対処できるかっていったら、絶対できないから、保護者は何やっているんだっていうことになって、やっぱり障がい者にとって、とても不利と私は思うから。

だから、親が考え方っていうか、根本的なことを変えていかないと、周りの人の見方、障がい者に対する見方も変わってくるんじゃないかなと私は思う。

だから、理解をしてもらうっていうのは大事だけど、親の、子どもに対してのし

つけとか、周りの人に対して迷惑かけないとか、そういう態度をちゃんと示さなかったら、先に進まないって私は思う。

今、コロナで、土日とか買い物には連れて行ってないけれど、そこどころが、地域の人に理解してもらおうっていう時には、大事じゃないかなと、私は思う。

ここ稚内では、将来的に親亡き後にどうするかっていうことが問題になる。長男は高等養護学校の時に先生と相談して、ちゃんとした就職の基盤ができていところに就職したほうが良いということで、準社員で年金とか退職金もいただけるということで、札幌の企業に就職させた。

その時だって、何年か前から札幌に連れて行って、地下鉄の乗り方から何から勉強させて、研修の時に困らないようにした。就職する、何かするということでも、根本的にそういうところを詰めていかないと難しいんじゃないかなと思う。

〈大谷推進員〉

親御さんの気持ちが何かとってもわかるような気がする。理解してもらうため、障がいのある子をお待ちの親御さんも、外に出ていったほうがいいなっていうの、なかなかそうはできないっていうのが、両方だなあというふうにつくづく感じた。

〈木上委員〉

僕の場合は、平成2年に難病に認定されて、平成5年から車椅子生活で今に至っている。

そして、札幌で入院していたけれども、いろいろな障がい者の方、いろいろな病気の方と会って、見たときは本当にショックが大きかった。こんな世界があるのかって、本当に何ていうのか、人間として、すごい辛いものがあった。

川口委員が言ってくれたように、やっぱり出て歩かないとわからない。限界がある。それから、なかなか家から出ない。友達の家なんかは行くけれども、ほとんど家の中って感じだから。これをどうしたらいいかっていうと、お付き合いしないとダメ、とにかく足を運ばなかったら、口で何言っても全然だめ。やっぱり足を運んでいくこと。そして話を聞くこと。聞いてあげることっていうのがやはり一番大事なことじゃないのかなっていう感じがする。

自分も一番初めは、人に見せるのがやっぱり恥ずかしかった。今まで元気だったのが車椅子生活になって、出て歩くのが恥ずかしい。それはみんな持っていると思う。これどうしたらいいかってなったら、川口委員が言ったように親が出す。そうでないと変わっていかない。とにかく、行動を起こすこと、足を運ぶこと。それが今できないなら、電話でもいい。これは、こまめにしなかったらなんぼ口で言ってもやっぱり全然駄目だと思う。これからを変えていくには、とにかく、足を運んで、寄り添うこと。

自分がそうなるまで何十年もかかったけども、一番苦しいというか、寂しいというか、何とも言えない。いつ自分がどうなるかわからないっていうのが本当に辛いし、苦しいと思う。そこをどうやっていくかっていうのは、やっぱりこれからの若い方々がするのが一番なのかなっていう感じがする。

稚内に14年いたけども、昔は本当に指さされて、いろいろと言われたけれども最近が変わった。僕は1人で生活しているから、買い物とかも全部1人でやっていて、週1回は車椅子であちこちに買い物に行く。そうしたら、若い人が来てくれる最近は。大丈夫ですかって声かけて。これほどうれしいことはない。その辺はかなり若い者変わったなって感じがする。そういう人が出て行ってわかってもらうことがやっぱり一番大事でないのかなっていう感じがする。

あとは、ぼちぼちと、焦らないでゆっくり、あんまり無理をかけないようにし

て、話を聞くこと。こっちからは言わない、とにかく聞くこと。これが一番初めのやり方ではないかなって感じはする。

〈大谷推進員〉

車椅子になる前の生活も経験されている方なので、いろんな時の思いがあって、経験されているので、すごくなにか、なるほどなっていうふうな思いで。

今おっしゃっていただいたお付き合いってとってもいいなって思った。障がいがあるとかないか関係なく、お互いに理解っていうのを見つけて、お付き合いがあって、いろいろなことを教えていただく。できることはしたらいいしってということで、付き合うってすごくいい言葉だなと思う。

〈小倉委員〉

当事者家族としてお話しする。一口に障がいといっても多種多様で、特に発達障がい、精神障がいは目に見えない上に、一人一人特性が違い、他者から気づいてもらいにくい。

最近ではテレビで特集されることも多く、発達障がいという言葉は大分認知されてきているのかなと思うが、その特性はやっぱり千差万別で、本人や家族でなくてはわからないというのが実状。

前回の議事録なども見たが、障がい児者がどこにいるのかわからないっていうお話もあった。でも、どこにいるのかわからないということは、それだけたくさんの方が、気にかけてくれているということでもあるのかなって私は思う。

当事者家族は、オープンにする方もいれば、障がいであることを隠したいという方や、我が子に障がいがあることを認めない家族もいる。それは、将来への不安だったり、世間体を気にしたりだと思うが、まず、障がいと聞いて、良いイメージを持つ人がいないのかなって思う。

実際私も、我が子が自閉症スペクトラムと診断がついた時、子どもがお店や公園などで奇声やかんしゃくを起こして、周囲の目が気になったり、肩身の狭い気持ちになるなど、自分を追い詰めたこともある。

息子の幼稚園入園の際も、診断はついていないが早期療育に通っていることで、すぐには入園許可が下りなかった。息子の場合は、話し合いを重ねて無事に幼稚園に入園できたが、入園できなかった子もいる。定型発達の子たちが普通にできることでも、発達に遅れのある子には普通が普通ではない、とても厳しい状況がある。

だから、知られたくない親や、認めたくない親もいると思うし、何かと不利になる状況を作りたくない。一番は、我が子に診断がおりるのは、認めたくないっていう思いが、少なからずあるのではないかなと思う。

でも、特性を伸ばすことで、抜群に生かせる能力もあり、環境を整えば、高い能力を発揮する部分もある。確かに苦手なことも多くて、支援を必要とする部分もあるが、すべてに支援しなければならぬ、手助けをしなくてはいけないという考えではなくて、もっと地域の皆さんに、発達障害について理解・意識して、見守ってもらえるだけでも、共生社会という言葉がすごく身近な存在になるのではないかと私は思う。もちろん、当事者や当事者家族も周囲から優しくされている気持ちやたくさんの方の支援を当たり前ではなく、感謝の気持ちを忘れてはいけないと思う。

すべての人が、お互いの個性を認め、支え合って、みんなにとって暮らしやすい社会になることが私の思いである。

〈大谷推進員〉

今おっしゃられた、本人や家族でないとわからないところは、本当にあるのだろうなっていう風に思いますけれども、環境を整えば特性を伸ばすことができるとい

うところもそうだなあというふうに思う。

〈内田委員〉

障がい福祉サービス事業所の職員、支援者側の立場でお話することももちろんできるけど、実は自分の妻は自閉症スペクトラムで、学習障害も持っていて、療育手帳も取っている。

稚内で結婚生活を6年過ごしたけれど、この地域は車の運転ができなければ厳しいので、周りの配慮や、思いやり、あと理解があって、何とか自動車学校に行って、本人は泣きながら行ってたけど、それでもクリアして、高齢者の施設に勤務することになったが、よくその中で力をつけていったなということ思い出した。

当事者視点の話を先にさせてもらうけど、やっぱり発達障がい、知的障がいは目に見えない障がいであるので、周りに理解されることはすごく難しい。

で、働く中においても、妻は最初障がい福祉の現場で働くことを選択しようとしていたが、やはり同じ障がいを持つ仲間とのコミュニケーションも難しく、結局高齢者の方の施設で働いていた。おじいさんおばあさんのケアをする中で、経験を積んでいったけれども、そういう働く機会に、例えば入浴の仕方とかケアの仕方とかを、障がいがある中で学ぶためには、職場でのサポート役は必要になる。

職場に理解のある人達がいればいいけど、なかなかそういう方がいなかったりして苦勞することがあり、僕も当時は宗谷圏域障害者総合相談支援センターの職員で、夜7時、8時ぐらいのフェリーで島から家に帰ってきてから、妻自身が1日どんなふうに高齢者のケアをしたのか、話を聞いていた。

多くの軽度の発達障がいや知的障がいの方たちが、稚内市内でも働かれていますと思うけれど、そういった方たちが孤立しないようにするための居場所づくりとか、支援の大切さっていうのはあって、稚内市障がい者地域活動支援センターとか、今はどんな形になっているのかはわからないけど、その当時は働いてる方たちのアフターケア、アフタークラブ的な活動にかなり力を入れた時期もあって、妻もそこに参加していた。

そういった経験を順当に積み重ねて、周りのしっかりとサポートにつながればいいけど、つながってない方たちにどんな情報提供ができるのかっていうのも、一つの大きな課題と思っている。当時は、圏域障害者総合相談支援センターでパンフレットを作り、障がいに対する勉強会とかをやったけれど、でもやっぱり足りず、実際に働いて地域生活をしている当事者の生の声を聞く機会を大事にしようということで、現在の稚内市老人福祉センターに集ってもらって、グループワークをしたり、レクリエーションをしたのを記憶している。

妻は、稚内で2級ヘルパー資格を取り、今は枝幸町のグループホームで世話人の業務を何とかやりこなしている。そういう発達障がいの人もいることを、皆さんに知っておいてほしいし、これから先、人手不足が言われてる中で、障がいのある方で、そういったケアに向いてる方はいると思う。なので、そういう彼らの力を引き出していくようなサポートもあっていいんじゃないかなと感じている。

そういったことを小倉委員もおっしゃっていたし、川口委員、木上委員のお話も聞かせていただいて、知っていただく機会を得るにはやはり外に出て行くことが一番だけど、そこに対する橋渡し、手引きを誰がするのかっていうことが大事だなと思う。

札幌では多分独自だと思うけれど外部ヘルパーという制度があって、稚内はそういった、移動支援含めて外部ヘルパーの制度自体があまり進まなかった。それは物理的な都市間の距離とか、娯楽が少なかったり社会資源が少なかったりっていう

こともあるけれども。そういった中で、外出の機会とか集まって話をする機会をどういうふうに作っていくのか、僕ら支援者としても、仕掛けや根回しをする必要があるんじゃないかと感じている。

〈大谷推進員〉

先ほど小倉委員がおっしゃっていたように、障がいは千差万別、多種多様、見える見えない、いろんな形があって、今、皆さんのお話聞いて、そうなんだよね、どこからどうしたらいいんだろうねと思った。

〈千葉委員〉

去年の5月に事業所を開設した時、事業所の申請書類とかで、「障害者の日常及び社会生活を総合的に支援する法律」という字を何十回パソコンに打ち込んだか考えた。

雑感なんだけど、障害者の日常及び社会生活を総合的に支援する法律があるのに、なぜこのような地域課題が出てくるのか、そして、なぜ解決されないままなのか、解決してるのもあるけどスムーズに解決できないのか、ちょっと考えた。

相互理解とか、もちろん当事者の社会生活を総合的に支援するとかになると、健全者も障がいを持っている人たちも、例えば高齢者も地域の人も総合的にお互いに理解しなければならぬと、法律家じゃないんでわからないけど、国で定めているっていうのは感じている。なのに、何で地域に広がっていかないんだろうかって、漠然と考えた。

行政の福祉課に相談に行っても、制度とかサービスとかの話はしてくれるけど、この日常生活を総合的に支援するっていう考えの話は、あんまり受けた経験がないんじゃないかなって思った。この法律があるからどうこうっていうわけじゃないけど、障がい者の地域生活が豊かであるために、自分たちが、当事者や地域の人を支援したり、生活したり、家族内でケアしたりっていうものだと思う。

就労支援事業所B型とかグループホームとかじゃなくて、理念的な、日常生活及び社会生活を総合的に支援するっていうものを地域の皆さんが持ってくれば、ちょっと近道になるんじゃないかなと考えた。

〈川口委員〉

障害者自立支援法になって、逆に動きが取れなくなった。

昔の措置の時代は、施設にいてもかえってお金がもらえたけど、今は何でもサービス利用料を取られて、どこかに行きたい何したいっていても、全てにお金がかかる時代になってしまった。

どこかにサービスを頼むにも全てお金が必要だから、利用するお金がある人はいいけれども、お金がない人は、それが全然できない。施設の方も人が少ない状態でサービスをできることにはなっているけれども、実際問題、どこかに憩いの場に連れて行ったり、サービスをやるものがとにかく少ないっていうのが現実だっていうのははっきり言って恒例の問題。

だから昔に比べて、今の制度は結局、障がい者の動きをとれなくしている。名前は素晴らしいけれど、障がい者の足を引っ張っている。

〈大谷推進員〉

さっき、どこからどうしたらいいんだろうねって言ったけれど、やっぱりできることから、自分のこととしてやっていくっていうのを、1人が一步の視点で、取り組みを皆でやっていったら、やっぱりできないものもいっぱいあるけど、できることもあるっていうのをちょっと今思った。

さて、どうしましょうって感じなんですけど、いろんな方面からやってかなきゃ

いけないし、いろんな考え方もあるし、現実的にちょっと厳しいところもあったりとかって、本当にいろんなことを考えながら、やらなきゃいけないんですけど、そんな中で本当にできることを、みんなでやっていけばいいなと思い、新たな案、当委員会としてできる案を作ったので、後半にお話できたらいいなと思う。

後半でまた、皆さんからお聞きする時間も持ちたいと思うので、とりあえず次に進むことにして、地域住民との相互理解ってところについて、言い忘れていたことがあったら、随時お知らせいただければと思う。

(3) 協議事項 地域課題解決に向けた取り組み実施について

地域課題解決に向けた取り組み実施案について、資料2のとおり事務局より説明を行った。また、事業実施案(4)の稚内市立図書館への協力依頼の結果を報告した。

〈大橋主査〉

資料2の事業実施案(4)については、先週2月18日に、推進員とコーディネーターと私と3人で、稚内市立図書館を訪問した。

委員会の概要の資料、資料2別添と同じものを持参して、障害者理解促進関連の図書のフェアを実施していただきたい、できれば12月3日から9日の障害者週間に合わせて実施をしていただきたいとお願ひしたところ、稚内市立図書館は、1か月単位で特定分野のフェアを実施しており、ちょうど障害者週間にあたる11月末から12月下旬までの期間でフェアを実施していただけるとお返事いただいた。

同時にパネル展も開催できるというお話をいただいたので、パネル確保の課題はあるけれども、フェア同じ11月末から12月下旬までの日程で、パネル展示場所の仮予約も入れていただいた。

(4) 協議事項についての各委員の意見

〈内田委員〉

事業実施案(1)を令和3年度に出来ない理由を、もう一度教えてもらえるか。

〈大橋主査〉

事業実施案(1)の内容を、推進員とコーディネーターと相談していた時に、こういうことを心配しなければならない、こういうことも決めなければいけないと、クリアしなければならない課題が、たくさん出てきた。

当初は、計画を令和3年5月の委員会で決定して、9月頃までの実施を考えていたが、準備期間を考えたらそのスケジュールは無理という意見になり、それであれば準備期間をとって令和4年以降に実施したいと考えた。

〈大谷推進員〉

補足なんだけど、今の主査の説明は、福祉サービス事業所による授産製品販売のイベント的は令和4年だけけれども、それに向けての、事業所の詳しい内容の理解だとか、その他は全部令和3年度に実施する。

〈大橋主査〉

福祉サービス事務所の事情も、これからどうしていきたいとかの意向もわかっていないので、そこを理解した上で、計画を練って進めたいと考えた。

〈内田委員〉

私のところも千葉委員のところも就労系の事業所で、千葉委員のところは、今鯛焼きを焼いたりお弁当を作ったりしていて、私のところも弁当作りをしている。

稚内市内では、社会福祉法人稚内木馬館がどーナつを作ったり、今やっているかわからないけれど、寺江食品さんがパンを作ったり、昔の最も歴史のある古い知的障がい者のモデル工場であった事業所さんとかがあって、稚内木馬館のように、木

製品のものづくりをして、手に触れてよさを分かってもらうような部分と、合わせて啓発活動するのがいいんじゃないかなと思っている。

これは1意見として聞いてほしい。つまりは、事業実施案の(1)(2)(3)を全部まとめて一緒にやったほうがいいんじゃないかなという意見。

で、今、時間ないっていうふうに言ったけど、事業所は機動力ありますんで。パネルだとか、そういった出展に関しては。

僕らも、工賃を求める事業を行っていて、このコロナ禍の中において非常に厳しい状況にあることは確かだ。その中で、密にならない、ソーシャルディスタンスをとってイベント開催してくことの困難さは重々承知している。承知して、どういうふうに販売していくのか頭をひねって考えている。

うちの事業所だと、ふるさと納税の関係があったり、インターネット販売で、昆布が売り上げを伸ばしている。千葉委員のところは秘境駅がある場所で、撮り鉄の方たちだとか集まるイベントがあったりして、食事をとったり、グッズの販売だとかやったりしている。集客の努力をせずに、何か人に何かを伝えてくってということは、ちょっとやっぱり。

稚内の人の動きは、人口減っているので変わったかと思うけど、組み合わせ次第によっては、大きなチャンスとチャレンジになるんじゃないかなと見ている。

非常に良い視点で、取り組むべき課題がここに挙がっていて、クロスオーバーしたり、折衷したりすることによって、より良い案に作り替えていくことができるんじゃないかなと。今日初めて参加して言わせてもらうのも恐縮なんだけど、何かそういう、少し柔軟に考えて、やれる機会をどういうふうに設定できないものかなというふうに思ったのがまず1点目。

あと、パネル展とか、僕も上川の地域でよくやっていたけど、見てもらう機会っていうのは、お祭りだとか、役場の一角を借りてだとか、そういう機会しかなくてはっきり言って素通りされている。注目を集めるような仕掛けをしてかないと、啓発活動に繋がらないんじゃないかなと肌で感じてきたので、その部分に関しては、何かをプラスアルファして取り組んでみるのも、一つのアイデアだなと思う。

〈千葉委員〉

取り組みについては大賛成。

自分は前職、豊富町の社会福祉法人サロベツ福祉会サロベツマイハートで手作りパンの授産事業所にいた。宗谷総合振興局の応援で授産の工賃アップも含め、月1回、1階の道民ギャラリーで販売をさせてもらっていた。当振興局のおかげで自分がいた時は、お客さんがたくさんいてすぐ売り切れになるといううれしい思いをした。朝豊富町から出発し、10時頃到着だったが、稚内市民の方々が並んで待っていてくれて、そこでいろんな話ができたり、サロベツマイハートの紹介ができたこともあった。

一度に大きな啓発はできないが、密接した人間の関係性の中から理解を得たり、例えば稚内市でもパンを売ってほしいというような声も聞けたのも確かなことから、地道に進めていくということが啓発事業には一番手っ取り早いのではないかなと思う。

ポスターやパネル展は、福祉従事者や関係者、家族等でないと中々見なかったり、素通りしたりというのは、札幌駅で実施されているのを見ても感じている。自分は福祉従事者だから見に行くのだろうと感じている。

コロナウイルスの関係等があるが、一つの事業所ではなく皆が集まると、大きな人の輪ができ、活動をしていくことで広がっていくのではないかなと思う。

ぜひ、コロナウイルスが収束し、安全性が確保できる段階で、イベント系の普及啓発活動並びに授産製品のPR等をお願いしたいと思う。

〈内田委員〉

もう一つアイデアがあり、この会議もそうであるが、今日自分は宗谷の南の端から来た。現在、皆さんご存じのとおりコロナウイルスの関係で、人が集まって催しをしたりイベントをしたりするのは難しい状況の中では、ネット上のリモート等に頼らざるを得ないというのも社会的には通年になりつつあると思う。そのため、ネット上で実施するというのも一つの手としてあるのではないかと思う。

例えば、できるものとできないものがあるかとは思いますが、啓発と注文販売の売上げを上げる活動。

資料（別紙2）には就労継続支援B型事業所の名前しか載っていないが、特定非営利活動法人南宗谷ひだまりの会ワークセンター南宗谷ひだまりは定員が14名となっているが、プラス6名で生活介護の事業も行っているため、計20名で事業所を運営している。20名のところ34名おり、施設外就労の方も多い。

本来であれば、昨年東京オリンピックとパラリンピックに合わせて、障がい者の文化芸術活動を全世界へ発信するための取組が準備されていた。まだ残っていると思うが、その中に障がいのある方々の自由な表現活動を応援するという取組があった。その中で絵画創作については南宗谷ひだまりの会でも活動メニューの中に取り組んでいるが、アート作品もあるとのことで、以前当麻町にいた時には障がい者の美術団があり、アートの活動も取り組んでいたことから、販売以外にも作品を見ていただく機会、物を販売する機会、障がい者の方々が一生懸命物事に取り組んでいる機会を発信するというWeb上での取組の提案をさせていただきたい。Web上での取組をすることによって、人が集まり実施するということから、少しは準備期間も短縮され、実現に向けて取り組んでいけるのではないかと感じた。

〈大谷推進員〉

ネットに疎い事務局と自分たちというのがあったため、意見として挙がっていなかった。そういうところで、委員の皆さんのご協力をいただければ、人が集まらなくともネット上で啓発できるというのは技術を駆使して実施できればいいことだと思う。PR方法の一つとして活用できたらと思う。委員の皆さんの技術等もまた更にご協力いただきたいと思う。

〈川口委員〉

資料2の案について、最初はこの宗谷圏域障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会が全然知られていないという話からどうやって知ってもらおうかという話だったかと思う。

その話をすると、一番下の子どもが小学校に入学した時、当委員会の話は、学期末等の時にプリントをもらい、先生から説明をされるという高等部3年生まで同じ段階をずっと踏んできた。なので、なぜ他の方々が理解できていないのかなと思った。養護学校では当委員会等についてのプリントが配布され、知る機会がたくさんあったが、普通校に子どもが通っている保護者の方々は、知る機会がないため、当委員会のことを知らない。そのため、知らない保護者の方々がたくさんいる。

PRよりも根本的に、障がいをもっている子どもの親が当委員会のことを知らないということが、先に進まない原因だと思う。

〈大谷推進員〉

この度、新しい委員さんに入っただけのことから、良い委員会になるのではと思っている。

推進員等も任期で交代するということから、中々積み重ねができなかったり、前任の方が積み重ねたものがしっかりと理解できていなくて1からスタートしているという

こともあるのかと思う。それではいけないので、1年1年より高まっていける委員会にしていかなくてはと改めて思う。

事務局が主となって今まで進んできていたが、実施についての一番の問題は、おそらく場所と日程のことで来年度の開催が難しいとの話が大きかった。先ほど内田委員よりお話のあった、場所で集まるのではなく、ネット上でという話であれば、違う方法で実施できるのではないかと思う。

〈大橋主査〉

先程、大谷推進員のお話であったとおりネットには疎い部分がある。

しかし、Web上での芸術作品の紹介というのは良いと感じた。機械には弱い部分もあるが、案の一つとして考えていきたいと思う。

〈大谷推進員〉

事務局だけではできないことであることから、委員の皆さんの力を貸していただければ可能だと思う。

〈内田委員〉

先程、川口委員のお話にあったとおり、この宗谷圏域障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会の認知度のことからすると、暮らしやすい地域づくりを推進するための道行政の旗振り役ということであれば、なおさらそういったところを入り口として、今は皆さんスマホをもっている時代でもあることから、QRコードか何かで読み取り、簡単なページを作るというのも良いと思う。しかし、行政ということもあり、簡単にページを作っているのか、許可が下りるか等の問題があるかと思う。

自分は道の単独の事業で若手福祉従事者ネットワークというものをやっていた。昔、若い人たちがだんだん福祉従事者を目指さなくなる中で、どのように福祉の魅力を発信していくかということに対しての事業を名寄市立大学、旭川大学等、自分は道北担当ということもあり、そこで啓発するための事業に取り組んでいた。発信するのは、FaceBook等での発信が主であったため、今はこのようなネットの時代になってきていると思う。

必要なときにたどり着くような、例えばチラシや、ネット上で拡散させるわけにはいかないと思うが、公式的な形でQRコードまでたどり着くようなページを見てもらう。

宗谷地域では、地域で暮らしやすい取組を当委員会を通して啓発にあたっているところまでは、広報できるのではないかと思う。

〈大谷推進員〉

とても貴重なご意見をいただきましたので、再度、委員の皆さんと一緒に協議していければと思う。

〈小田桐委員〉

事務局が作成した案はどれも実現できれば効果があるのではないかと思った。

比較的イメージが湧きやすく、割とすぐに実施できるのではないかと思ったのが授産製品の販売。先程、内田委員からお話のあった社会福祉法人稚内木馬館多機能型障害福祉サービス事業所手作り工房どーなつの、どーなつを販売しているのを見たことがあり、確か、実際に事業所で働いている方が販売をしていたかと思う。作るだけではなく、販売するところまで行い、障がいのある方が、自分たちが作った製品を売り、皆が喜んでいるというのを感じてもらえるという部分はあるかと思う。

最初の相互理解というところの少し関係する部分で、聞いていて思ったことは、例えば最初の方に川口委員からお話のあった買い物のことで、自分（川口委員）は子どもと一緒に買い物に行くが、他の保護者の方は、周りの目が気になりなかなか子どもと一緒に連れて行けないという話をしていた時に、障がいの子どもをもつ親が地域にどう

見られているかという、そこを自分たちが受け入れられていないのではないかと  
ところを改善してもらうために出てもらい、自分たちが社会に貢献でき、受け入れら  
れるというのをわかってもらうために、授産製品の販売というのはそういう意味でも効  
果があるのではないかと思う。

もう一つ、もう実際に図書館の方に事務局の方が行き、フェアというものを計画され  
ているということなので、これも人が集まるという今最も懸念されている事態を招く  
ことはないと思うので、比較的すぐに実施できるのではないかと思った。

現在コロナ禍ということもあり、インターネットは予算が伴ってしまうことがある  
かと思いや難しいのではないかと思うところもあるが、予算の伴わない FaceBook 等  
を立ち上げて、「〇〇で今日授産製品の販売を行っています。」や「販売も盛況に終わ  
りました。」等、他に図書館のフェアも FaceBook があれば良いのかなと思った。これも負  
担になってしまう話だと思うので、ゆくゆくはできればいいのではないかと思う。

後は、他のイベントを開催しているときに一緒に実施する等、コロナ禍でイベント等  
も軒並み中止になっているため、すぐに実施というのは難しい。コロナ禍が明ければ、  
イベントの開催は、ホストの意向やどういう種別のイベントなのかということもあり、  
一緒に実施するというのは中々難しいかもしれないと思うが、実現できれば効果  
があるのではないかと思う。自分は実現できるのであればすべて大賛成だと思う。

〈鈴木委員〉

自分は、障がい者の部分については無知なことが多いため、話を聞いていて驚いた話  
がたくさんあった。

事務局の方で考えていただいた取組の案の、図書館での書籍の紹介という部分で、自  
分は本にあまり詳しくなかったため、本のリストを見て障がいに関わる本がたくさん  
あるということを初めて知った。「こんな夜更けにバナナかよ」はこの間テレビでも放  
送されていた。有名な方が出演されていたため、見たことある方もいらっしゃると思  
う。一覧にある書籍は全然知らなかったため、こういうのも、もしイベントができるの  
であれば、本について紹介するだけで少しでも理解していただけることは増えるの  
かなと思うので、良いと思った。

他の部分についても、自分は理解しきれていないところもあるが、手伝いができる  
ところは、手伝いをさせていただければと思う。

〈大谷推進員〉

委員の皆さんからいただいた意見は相互的にできるものは取り組んでいきたいと思  
う。委員の皆さんのそれぞれの力も惜しまないようにしていきたい。

〈川口委員〉

現在、コロナ禍で、もし自分の子どもがコロナウイルスに感染したらどうしようかと  
考えたとき、一番下の子どもは親と一緒にいないと無理な子どもである。治療で歯  
医者へ定期的に行っているが、「痛いけど、我慢してね」等の声かけは逆効果になり、  
痛いや怖いといった言葉は禁句な子どもである。そういった声かけをされると、  
コントロールができなくなってしまうため、コロナウイルス感染した時には、親も  
一緒にいないと思っている。防護服を買ったり、フェイスシールドを買ったりし、  
一緒に入院するという覚悟を決めている。子どもはマスク生活が必要な病気にかか  
っているため、マスクをつけることは慣れており、感染する可能性も低いと思  
う。防護服は余っていたため、小児科へ持っていった。コロナウイルスの関係も  
あり使用したと言っていたため持っていったのは良かったと思った。

障がいのある子ども達が、マスクができなかったりした時にコロナウイルスに感  
染した時はどうするのかという親の不安があると思う。そのため、マスクをしてい  
ない中

高生の姿を見たときに、なぜマスクをしていないのかと思う。マスクをしないという甘い考えが自分の家族を苦しめていることになるのではないかと思う。

現在、コロナウイルスのワクチンができ、少しは収まるかもしれないが、その間に何が起るかわからない。親でもよく見てもわからない状況なのに、コロナウイルス等の病気になった時、どのように対処したら良いのかと思う。そのため、周りの人がわかって支えてくれるということがあれば良いと思う。その障がいの子どもによってもそれぞれ特徴があることから、病院の先生や看護師さん等がどこまで理解ができるのかということもあるかと思う。

〈小倉委員〉

先程、内田委員や千葉委員のお話の中にあつたように、パネル展を素通りしてしまうというところは、自分も当事者の家族になるまでは素通りしてしまっていた。

しかし、実際に娘が障がいの診断がついて、たくさん傷ついたこともあつたが勉強をし、パネル展や授産製品の販売を皆で共有しながらぜひ行ってみたいと思った。

いいよの会でも、話にあがることがある。そのため、注目を浴びるための工夫というのは重要だと思いながら聞いていた。

本日、初めて参加させていただいて、たくさんの委員さんの意見を聞くことができ、改めて自分自身勉強になり、すごい熱い思いもたくさん聞くことができてうれしく思った。

今回、自分が委員として携われることになったことから、いいよの会でも、次回傍聴席の方でお話を聞きたいという方が多数いるため、次回も楽しみに思っている。

〈大谷推進員〉

取組の案について検討していた時に、本当に実現できるかどうかとは別にしても、例えばレゴブロックで街づくりをすることができれば、こどもも障がい福祉とかとは関係なく、レゴブロックで遊びながら、段差であったり、見えない部分に仕掛けがあつたりとそういう工夫が必要であるという話はでていた。

委員の皆さんにも、ただパネルを張ってPRをしたいという話ではなく、その方法を一緒に考えていければと思った。

毎回お願いしているところではあるが、随時何か意見や思いついたこと等があれば事務局の方へ連絡をお願いしたい。

会議自体は年に3回と限られてしまうため、委員会の後に意見があつたとしても、事務局の方に連絡いただければ、次の会議等で委員の皆さんから意見をいただくこともある。色々な経験や思いを吸収していきたいと考えているため、ご協力をお願いしたいと思う。

(閉会)